

中世における「テトラビブロス」の伝承の研究

山本 啓二

1. はじめに

2世紀のアレクサンドリアで活躍した天文学者プトレマイオスは、一般に「テトラビブロス」と呼ばれる占星術書も著している。プトレマイオスは、当時の占星術を学問として確立するために、その根拠にギリシア哲学を導入した最初の人物であった。この書はギリシア世界では圧倒的な影響力を持つに至り、複数の注釈書が書かれた。その後、7世紀にはシリア語に翻訳されたが、訳者は当時を代表する知識人のひとりであるセーポフトだとされている。またイスラーム世界では、8-9世紀に2度にわたってアラビア語に翻訳された。その後この翻訳をもとに何度か注釈書が書かれたことが知られている。さらに、11世紀にはアラビア語テキスト全文に注釈をほどこした大部なものまで現れた。

他方、ラテン世界では、12世紀になってアラビア語版からラテン語訳が作られ、13世紀には、前述のアラビア語の全文注釈テキストがラテン語に翻訳された。そして、これらはともに、印刷術が発明されて間もない15世紀にヴェネツィアで出版されるに至ったのである。

本研究の目的は、古代・中世を通じて占星術の「バイブル」と呼ばれ、さまざまな分野に多大な影響を及ぼした「テトラビブロス」の2つのアラビア語版をもとに、一方ではギリシア語の原典、注釈書、およびシリア語版と比較し、それぞれがどのような系統関係にあるかを調べ、他方では、ラテン語版と比較し、アラビア語版がどのように西欧に伝承されたかを調べることである。本稿ではその研究の一部を報告したい。

2. 従来の研究

「テトラビブロス」はその名のとおり4巻から構成されており、写本によっては「アポテレスマティカ」とも呼ばれる。内容は、第1巻が主に占星術の専門用語、第2巻が多くの人々に関わる全般占星術についてであり、特に12、14章は気象学を扱っている。また、第3巻と第4巻は個人に関わる占星術であり、第3巻の11-14章は気質や肉体的・精神的病について書かれている。ギリシア語原典の刊本の歴史は古く、まずカメリウスが1535年にニュルンベルクから出版し、これに続いてメランヒトンが1553年にバーゼルから出している。近代になってからは、まず1940年に、F. ボルとその弟子のE. ブールがライプツィヒから、一方、F. E. ロビンズが英語訳との対訳でロウブのシリーズで出版した。その後、1985年にS. フェラポーリがイタリア語訳との対訳でヴィチェンツァから出版し、最新のものでは、W. ヒューブナーがトイブナーのシリーズで1998年に出した版がある。近代の校訂版に用いられているギリシア語写本は、主に13-15世紀のものであり、ギリシア語

で書かれた注釈書のうち、現在まで伝えられているものは、哲学者のポリフェリオス(234-305)¹とプロクロス(412-485)²によるものである。

シリア語訳は、パリの国立図書館に写本が断片的に残されているのみであり、現在ドイツ人研究者 Edgar Reich によって校訂版が準備されつつある³。また、後で述べる 2 種類のアラビア語版は、現在、筆者が校訂版を準備中である。ラテン語訳は 15 世紀に出版されたものがあるだけで、校訂版はない。すなわち、現在までに出版されている校訂版は、ギリシア語原典だけである。このような状況から、いかに今まで「テトラビブロス」の伝承の研究がなされていなかったかということがわかる。1907 年に、イタリア人科学史家 C. Nallino がひとつのアラビア語写本に基づいて「テトラビブロス」に触れて⁴以来この 1 世紀の間、1980 年代にアメリカの天文学家 G. Saliba がその重要性和シリア語訳の存在に言及した程度である⁵。

3. アラビア語訳

10 世紀のイブン・アン＝ナディームによる書誌文献『フィフリスト』には、アッパース朝第 2 代カリフ、マンスール(位 754-775)の時代にアル＝バトリーク(あるいはアル＝ビトリーク)が、占星術師であったウマル・イブン・アル＝ファッルハーン(762-812)のために、プトレマイオスの「テトラビブロス」を翻訳し、ウマルはその著作の注釈者であったと書かれている。現存するアラビア語写本は、ウマルに帰される注釈(以後ウマル版と呼ぶ)のみであり、3 種類の写本が知られている。

同じく『フィフリスト』によれば、イブラーヒーム・イブン・アッ＝サルト(9 世紀)が「テトラビブロス」を翻訳し、フナイン・イブン・イスハークがそれを改訂し(以後フナイン版と呼ぶ)、サービト・イブン・クッラが(836-901)第 1 巻のみを要約し、その意味を明らかにしたことになる。フナインは 809 年ころに生まれ、873 年に亡くなるまでバグダードで活躍した人物である。現存するアラビア語写本はフナインによる改訂版のみであり、イブラーヒームによる翻訳は残っていない。フナイン版の写本は 7 種類あり、そのうち 2 種類がサービトの手が加えられたものである⁶。

『フィフリスト』には、注釈者の名前が何人か挙げられているが、それらのうち写本が存在しているのはバターニー(929 年没)だけであり、ベルリンに 1 種類のアラビア語写本があるだけである⁷。これは明らかにフナイン版に基づいている。11 世紀になって、カイロのアリー・イブン・リドワーン(998-1061)という医者が、フナイン版の全文を引用して、それに注釈を施しているが、この写本は少なくとも 12 種類が確認されている。

アラビア語からラテン語への翻訳について言えば、フナイン版は 1138 年にティヴォリのプラトーネによってラテン語に翻訳され、1484 年と 1493 年にヴェネツィアで、また 1533 年にはバーゼルで出版された。一方、アリー・イブン・リドワーンによる注釈書は、カステイーリャ王アルフォンソ 10 世の命で 1256 年にパルマのアエギディウス・デ・テバルディスによってラテン語訳されて、1493 年にヴェネツィアで出版された。その他にも 1206 年に作られた訳者不明のラテン語訳も存在している⁸。

4. アラビア語写本

上で述べたアラビア語写本の一覧を挙げると、以下ようになる。現在確認されているすべての写本を網羅している。ただし、リドワーンによる注釈の写本は、コピーが手元にあるものに限定した。

〈ウマル版〉

K = Cairo, Ḥalīl Āgā, mīqāt 5, ff. 52 (1250 H).

L = Cairo, Dār al-kutub, mīqāt 123, ff. 75 (1250 H).

U = Uppsala 203, pp. 2-151 (1304 H).

Kと**L**は同系統にあり、ほとんど一致している。**U**の冒頭には、ウマル自身の序文があり、それにはウマルの没年であるヒジュラ暦196年シャッワール月(西暦812年6または7月)に書かれたことが記されている。

〈フナイン版〉

C = Cairo, Dār al-kutub, mīqāt 1054, ff. 1b-103b (1100 H).

D = Dublin, Chester Beatty 4566, ff. 1a-49a (10C H).

E = Escorial 1829/1, ff. 6b-118a (年代不明).⁹

F = Firenze, Laurenziana 352, ff. 1b-236a (893 H).

N = Nağaf, Maktabat al-Imām al-Ḥakīm 236, ff. 1b-72b (1136 H).

T = Teheran, Aşğar Mahdawī 486, ff. 1a-175a (1027 H).

Z = Damascus, Zāhirīya 7974, ff. 1a-70b (年代不明).

系統は大きく2つに分けられ、一方は**CFZ**のグループであり、他方は**EDNT**のグループである。**D**は第1巻9章から第3巻3章までしかない不完全なもので、まだ不明な点が多くある。また、**CZ**、**NT**はそれぞれ近い関係にある。**E**の著しい特徴は、欄外にさまざまな翻訳や注釈を書き込んでいることであり、そのひとつが、サービト・イブン・クッラによる説明である(「サービト」として引用)。その他の注釈者としては、ウマル・イブン・アル＝ファッルハーン・アッ＝タバリー(「タバリー」として引用)、さらにはアル＝フサイン・イブン・ユニス、アル＝フサインという名前が確認できる。その他にも未確認のものがある。さらに、1箇所だけであるが、「別の訳」として引用されている所がある(第1巻1章14節)。これはウマルが基にした、アル＝パトリークの訳だと考えることもできる。

写本に見られるアラビア語のタイトルは、

FZ — Kitāb al-arba' maqālāt fī l-aḥkām li-Baṭlīmūs al-Qalawdī tarğama Ḥunayn bn Ishāq iṣlāḥ Ṭābit bn Qurra al-Ḥarrānī(プトレマイオス・クラウディウスの判断に関する4巻の書。フナイン・イブン・イスハーク訳、ハッラーン出身のサービト・イブン・クッラ改訂)¹⁰

CTN — Kitāb al-arba' maqālāt fī l-aḥkām li-Baṭlamīyūs iṣlāḥ Ḥunayn bn Ishāq(プトレマイオスの判断

に関する4巻の書。フナイン・イブン・イスハーク改訂)¹¹

E – Kitāb al-arba‘ li-Baṭlamīyūs fī l-qaḍā’ bi-n-nuḡūm ‘alā al-ḥawādīṭ (プロトレマイオスの、星による出来事の判断に関する4巻の書)。

Cのタイトルだけについて言えば、内容に反して**NT**との類似性を見せている。また**FZ**は、フナイン訳でサービト改訂としている点で特徴的である。それらに比べて、**E**だけが全体的に異なるタイトルを持っていることが注目される。

〈バターニーによる要約〉

B = Berlin 5875, ff. 1a-62b (年代不明)。

第1巻の1-7章, 9章, 15章-22章, 第2巻の1-2章, 4-5章に対する注が欠けている。『フィフリスト』では、バターニーは注釈を残したことになっているが、この写本に関して言えば、それは注というよりもフナイン版の要約と呼ぶべきものである。

〈アリー・イブン・リドワーンによる注釈〉

1. Teheran, Maḡlis 191, ff. 1b-124b (1284 H).
2. Oxford, Bodleian Marsh 206, ff. 1b-200b (年代不明)。
3. Princeton, Yahuda 3515 = Mach 5050, ff. 1b-144b (8-9C H).
4. Escorial 913, ff. 1b-126a (745 H).
5. Escorial 916, ff. 1b-129b (10C H).
6. Rampur 4188, ff. 1b-104a (17C AD).
7. Rampur 4189, ff. 1b-279b (1711 AD).
8. Patna 2474, ff. 1b-190b (1159 H).

リドワーンはフナイン版を基にしており、各巻をさらにそれぞれ3部に分けている。第1巻は第1部(1-3章), 第2部(4-17章), 第3部(18-24章), 第2巻は第1部(1-3章), 第2部(4-9章), 第3部(10-13章), 第3巻は第1部(0-5章), 第2部(6-10章), 第3部(11-14章), 第4巻は第1部(1-3章), 第2部(4-8章), 第3部(9章)となっている。

5. ギリシア語原典, シリア語版, アラビア語版の対照

それぞれの章区分は、以下の表のようになっている。ギリシア語原典はW. ヒューブナーによる校訂版¹²に基づいており、章区分だけでなく節区分もそれに基づいている。

シリア語訳に関しては、パリ写本 346¹³ と 392¹⁴ がある。346 は表にあるように、冒頭から第2巻の9章15節までと、第3巻の3, 4章が欠落している。ただし第2巻の3章33節の一部は断片的に残っている。もうひとつのパリ写本 392 については、全体で8フォリオのみの断片であり、第1巻の2, 3, 9, 11-13, 21章, 第2巻の1, 3, 8章, 第3巻の2, 3章のそれぞれが断片的に残っているのみ

である。

ウマル版は、比較的ギリシア語版に近いが、第1巻の9章と21章が細分化されている。フナイン版は、まず第2巻の2, 3章がギリシア語版と異なっており、さらにギリシア語の第3巻1章は、フナイン版では1章の前に置かれ、第4巻の1, 2章はひとつの章になっている。

Part I			Part II				Part III				Part IV			
Gr.	Hu.	Um.	Gr.	Sy.	Hu.	Um.	Gr.	Sy.	Hu.	Um.	Gr.	Sy.	Hu.	Um.
1	1	1	1	*	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1
2	2	2	2	*	2	2	2	2	1	2	2	2	1	2
3	3	3	3	[33]		3	3	*	2	3	3	3	2	3
4	4	4	[1]-[2]		2		4	*	3	4	4	4	3	4
5	5	5	[3]-[50]		3		5	5	4	5	5	5	4	5
6	6	6	4	*	3	4	6	6	5	6	6	6	5	6
7	7	7	5	*	4	5	7	7	6	7	7	7	6	7
8	8	8	6	*	5	6	8	8	7	8	8	8	7	8
9	9	9-11	7	*	6	7	9	9	8	9	9	9	8	9
10	10	12	8	*	7	8	10	10	9	10	10	10	9	10
11	11	13	9	10	8	9	11	11	10	11				
12	12	14	10	11	9	10	12	12	11	12				
13	13	15	11	12	10	11	13	13	12	13				
14	14	16	12	13	11	12	14	14-15	13	14				
15	15	17	13	14	12	13	15	16	14	14				
16	16	18	14	15	13	14								
17	17	19												
18	18	20												
19	19	21												
20	20	22												
21	21	23-25												
22	22	25												
23	23	26												
24	24	27												

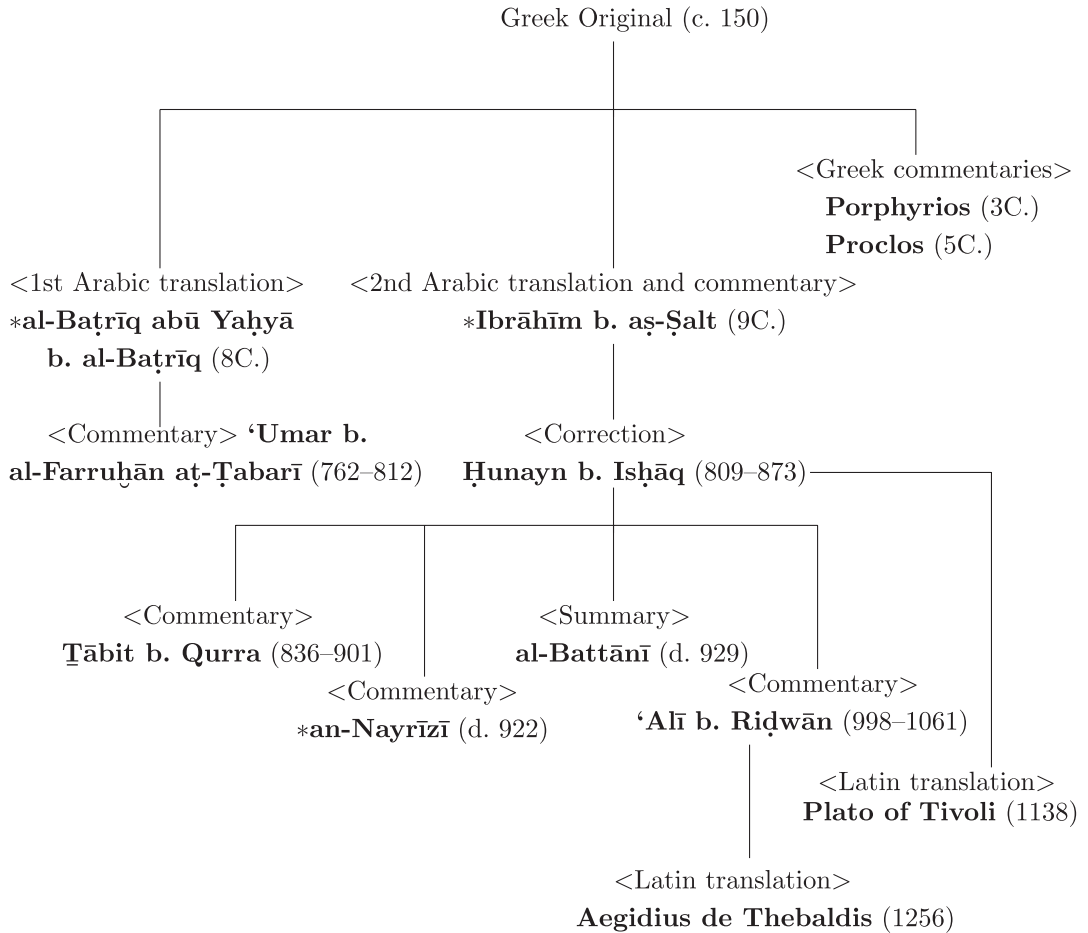
6. サービト・イブン・クッラの関与

すでに述べたように、フナイン版は後にサービト・イブン・クッラによって第1巻の意味が明らかにされたことになっている。サービトの手が加えられている写本は、CZのみであり、そこには「サービトは言った……」という文が挿入されている(第1巻で11箇所;第2巻で2箇所)、また上述のようにEの欄外にもそれが書かれている(第1巻で7箇所;第2巻で3箇所)。これらの写本が、実際にサービトが手を加えたテキストを伝えているとすれば、彼が行なったことは、ほとんどが語句の

意味の説明であり、翻訳そのものに手を加えたわけではないことがわかる。

7. まとめ

中世における「テトラビブロス」の伝承を表にすると、ほぼ以下のようになる。*はテキスト資料が現存しないことを示している¹⁵



注

1. Hieronymus Wolf によって 1559 年にパーゼルから出版されている。また、St. Weinstock と E. Boer による校訂版が、*Catalogus codicum astrologorum Graecorum*, V 4, 1940, pp. 187–228 にある。このテキストは全 55 章からなっている。
2. このテキストは、1554 年にパーゼルでメランヒトンによって、また 1635 年にはライデンでアッラティウスによって出版されたが、近代の校訂版はない。なお 1822 年に、J. M. Ashmand によって、1635 年のライデン版から英語訳が作られている (*Ptolemy's Tetrabiblos or Quadripartite: being four books of the influence of the stars. Newly translated from the Greek paraphrase of Proclus*)。

3. シリア語写本に関する情報は、Edgar Reich 博士の未発表の研究による。この場を借りて同博士に感謝の意を表したい。
4. Carlo Alphonso Nallini, *Al-Bāttānī, Opus Astronomicum*, II, Milano, 1907, p. XV.
5. George Saliba, 'Review to Fuat Sezgin, *Geschichte des Arabischen Schrifttums*, Bd. VII', *Journal for the History of Arabic Science*, 6, 1982, p. 163.
6. F. Sezgin, *Geschichte des Arabischen Schrifttums*, VII, 1979, Leiden, p. 43 にある写本カタログのうち、イスタンブール大学図書館 6141 は第 1 巻と第 2 巻の 3 章までが「テトラビブロス」であり、その後続くものは別作品である。フィレンツェのラウレンツィアーナ図書館の写本番号は 321 ではなく 352 の間違いである。また、ハイデラバード(インド)のアーサフィーヤ図書館とサイデーヤ図書館の写本は、ともにクーシュヤール(11 世紀)の『占星術入門』である。この著作については、M. Yano, *Kūṣṣyār Ibn Labbān's Introduction to Astrology*, Tokyo, 1997 を参照。なお、ハイデラバードでの現地調査は、2006 年 8 月に矢野道雄教授と共に行なった。
7. H. -P. -J. Renaud, *Les manuscrits arabes de l'Escorial*, Tome II, 3, Paris, 1941, pp. 116-17 は、エスコリアル写本 969/2(ff. 20r-80r)を、バッテリーによる「テトラビブロス」の注釈としているが、実際はバッテリーに帰された占星術の概論である。
8. Ch. H. Haskins, *Studies in the History of Mediaeval Science*, New York, 1927, pp. 110-11 参照。
9. E. Levi-Provencal, *Les manuscrits arabes de l'Escorial*, Tome III, Paris, 1928, p. 308 は、エスコリアル写本 1829/1 をバッテリーによる「テトラビブロス」の注釈だとしているが、実際はフナイン版の翻訳である。
10. ただし、Z は Kitāb al-arba' maqālāt fi l-aḥkām の部分が読み取れない。
11. ただし、T は li-Baṭlīmūs.
12. *Apotelesmatika*, Clavdii Ptolemaei opera quae exstant omnia, vol. III 1, ed. by W. Hübner, Leipzig, 1998.
13. 1309 年に書写されたもので、ヤコブ書体で書かれている。F. Nau, 'La cosmographie au VIIe siècle chez les Syriens', in *Revue de l'Orient Chrétien*, IIe série, 5, 1910, pp. 225-254 参照。
14. F. Briquel-Chatonnet, *Manuscripts syriaques de la Bibliothèque nationale de France*, Paris, 1992, p. 109 参照。
15. この表には含まれていないが、『フィフリスト』によれば、エウトキオス(5 世紀)が第 1 巻の注釈を書いたことになっている。エウトキオスが、アポロニオスの『円錐曲線論』やアルキメデスの『球と円柱』、『円の計測』、『平面板の平衡』の注釈を書き、『円錐曲線論』の注釈がアラビア語に翻訳されたことは知られている。しかし、「テトラビブロス」の注釈についてはギリシア語でもアラビア語でもテキストが何も残っていない。ちなみに、エウトキオスに帰される占星術的なアフォリズムは残っていて、6 写本が確認されている。そのうち少なくとも 5 写本の冒頭には、「プトレマイオスの『テトラビブロス』の注釈者エウトキオスは言った……」と書かれている。